

「ゆめポッケ」

配布の現場はいま



5

長年にわたり、カトリックとプロテスタントの抗争が続いた英国・北アイルランド。ここにも、「ゆめポッケ」が届けられている。

かつて激戦地として知られ、「爆弾都市」と言われた町・ベルファストには、レン

ガ造りの新しい家が立ち並び、遠方に見える小高い丘にはのどかな草原地帯が広がっていた。平和なヨーロッパの都市をほつとさせるそのさまに、一見、激戦の跡はつかえない。

北アイルランドの人口は約160万。その3分の1が先住のケルト民族やバイキング、ノルマン民族を祖先とするカトリック系住民、3分の2がスコットランド人やイングランド人など、英国本土からの移住者を祖先とするプロ

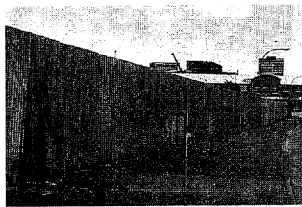
テスタント系住民だ。過去、プロテスタント系住民が、アイルランドを英国の植民地にしようと、先住のカトリック系住民に対し、政治的、経済的に弾圧をかけたことが発端となり、両派の対立が始まっ

た。特に1970年を前後して、激しい抗争が繰り広げられ、5000人近くの犠牲者を出したといわれている。

「ゆめポッケ」の受け入れ団体である現地NGO（非政府機関「コリメーラ共同体」）のスタッフの案内で街を歩いてみると、和平合意（98年）後も両派の対立が根深く残っているのが分かる。

町を貫いている「ピースウ

「壁」を取り除く役



両派の居住区を隔てる「ピースウォール」。この壁が取り払われた時、北アイルランドに真の平和が訪れる（ベルファスト）

う宗派別の象徴色が順序よく塗られ、両派の居住区を主張していた。

居住区が分けられているため、子供たちが通う学校も当然、宗派別だ。同世代といえども、両派の交流はほとんどない。同団体のソーシャルコーディネーターであるリサさんは、学校教育

の場で宗派の主義主張が強調されている一面を指摘し、「北アイルランドの子供たちは普段の生活で他宗教、異文化に触れることがないため、どうしても他者に対して閉鎖的になってしまうのです」と話した。

同団体は、両派の相互理解と信頼関係の構築を目的に設立された宗教対話組織だ。両派の青年の交流、学校教育の

支援など、草の根レベルでさまざまな和解プログラムを展開している。代表のトレバー・ウィリアムズ師は、子供たちの置かれている特殊な環境を強調し、その上で、日本からおくれる「ゆめポッケ」の持つ役割について、次のように説明した。

「子供たちはまず、なぜ見ず知らずの人が自分にフレゼントをくれるのだろうと考えます。『ゆめポッケ』を通じて、知らない人が自分のことを考えてくれること、知らない人とも友人になれることを学ぶ。それがこの子供たちのものの見方、考え方、そして人生までを变えることになるのです」

両派の心の中にある「壁」が取り除かれなければ、北アイルランドに真の平和は訪れない。ウィリアムズ師らは子供たちに対し、他者を受け入れ、思いやる心を持つことの大切さを説き続けていた。その一役を「ゆめポッケ」が担っている。（おわり）

英国・北アイルランド

オール（平和の壁）は、両派の居住区を隔てている。抗争の激化を防ぐために造られた。相互の往来は可能だが、その傍らには火炎瓶や投石の跡がいくつもみられた。スタッフによると、現在も毎週のように抗争があり、時には死傷者も出ているという。電信柱などには、「青・白・赤」（プロテスタント）、「緑・白・黄」（カトリック）とい